

(研究ノート)

二宮尊徳の人間観 —現代へのメッセージ—

渡 部 治

キーワード

報徳 天道 人道 分度 推譲

1 尊徳の思想を伝える三書

みずからは体系的な文章を残していないが、その人間的な影響によって、その思索と行動の跡を知ることのできる人物が歴史のなかにはしばしばみることができる。幕末の西郷隆盛もそうであろうが、彼と同時代の、本稿で取り上げる二宮尊徳もまたそのひとりである。

生粋の農民出身であり、その生涯の時間のほとんどを農村復興に費やした人であるから、もとより書齋に端坐して沈思黙考、その著作に自己の時間を割くことなどできようはずもなかったが、彼は何より有能な弟子に恵まれていた。富田高慶、福住正兄、斎藤高行といった人たちである⁽¹⁾。それぞれに『報徳記』『二宮翁夜話』『二宮先生語録』の著作がある。私は折に触れてこれらの著作に親しんできたのだが、それぞれ、ひとかどの学者といってもよい学問的教養を積んだ人であり、彼らの著作なくして尊徳の思想と行動が後世に伝わることはなかったであろう。

『報徳記』は尊徳逝去の直後に一気呵成に書かれた感のある尊徳の伝記である。『二宮翁夜話』は尊徳に近侍した福住が折々の尊徳の言説を記録し集成したものである。また『二宮先生語録』は漢文で書かれたものであるが、やはり、著者がかなり体系的な体裁を意図して尊徳の思想を整理、構築しようとしたものである。それぞれに固有の個性のある著作であると言える。

これらの著作を通読して思うのは、尊徳に向けるそれぞれの著者の熱誠の情が行間に溢れていることであり、それは彼らがいかに尊徳を敬愛し尊崇していたかということをおぼわす。二宮尊徳全集は全36巻あり⁽²⁾、そのほとんどはいわゆる農村復興の仕法書で埋められているものであって、行動の人、尊徳の実態を知るにはむしろそれらの仕法書を渉猟することが大切であるにしても、尊徳の行動の核心にある思想を知るには、まずこの三書を読んで足りるのではないかと思う。

しかし、尊徳の思想を体系化して語ろうとすると、直ちに向こうからそれを拒否する力がかえってくるような思いがする。それは尊徳の思想の本質を物語っているのであろうか。

従って、以下の小稿は、いまだ尊徳の思想の全容を掴みえない筆者が、上掲三書を中心に尊徳の思想の内部空間を彷徨し、そこから読み取ろうとした尊徳の思想の一面である。私はそれを私たちが生きる現代への貴重なメッセージとして読もうとした。

2 知識と経験について

尊徳において私たちが理解できることの第一は、尊徳においては知識と経験がしっかりと結び付けられて理解されているということである。知識が経験によって生まれるということなど当然の常識に属することとも理解されるだろうが、尊徳においてはこのことが普通に考えられる以上に徹底して理解されている。それは上掲三書を含めて尊徳の文言のあらゆるところに現れている確信である。

ところでその「経験」とは何か。それは生粋の農民として農事に携わってきた彼の「経験」である。尊徳は何を「知った」のであろうか。過酷な自然は一家の田畑を壊滅に追い込み、父母は早逝し、兄弟離れ離れになるという惨禍をもたらしたが、彼はその自然に果敢に立ち向かうなかで、そこから意外な実りを得ることを知り、そうして一家再興の途に立つこともできた。過酷と見える自然も手をかけ心を差し向ければ多くの実りをもたらしてくれることを彼はその困苦の労働のなかから痛切に知った。

それゆえ尊徳にとって書物というものは経験に照らしてその意味が照明（或は証明）されるものでなければならなかった。そのことを私たちによく教えてくれるのは、例えば儒仏に関わる彼の解釈である。言うまでもないが、彼は先学の注釈という存在など全く意に介さない。宗派とか流派もまったく問題にならない。そういう表現のなかにある経験的な意味を尊徳は取り出すのである。それが彼にとって書物を読み、書物を知ることなのである。書物を読むそのような様を尊徳ほど私たちに端的明快に教えてくれる存在はない。

一円融合会から刊行されている現代版報徳全書⁽³⁾のなかには佐々井典比古の『訳注 二宮先生語録』上下二冊が収められている。斎藤高行の『二宮先生語録』を現代語訳したものであるが、日本倫理彙編には巻四までしか収められていないのに対して巻五までの全容を収めており便宜なものであった。その上巻の解題に巻五までの全内容を主題別に分類して整理しているのも懇切な教示であるが⁽⁴⁾、それによれば儒教についての尊徳の言説は四十八、仏教については七十一である。そして儒教についてであるが、その三十三のものが巻三に、仏教についてはその五十八のものがやはり巻三に集中的におさめられており、用意周到な著者の編集意図が窺われるのだが、今、私の述べた感想は言うまでもなくこれらの文言を読んでのことである。それだけの数があるために例示するのに困るくらいであるが、試みに儒仏に関わる表現の若干をあげてみたい。

たとえば有名な『大学』冒頭の表現である。「大学之道。在明明徳。在親民。在止於至善」（だいがくのみちは、めいとくをあきらかにするにあり。たみをあらたにするにあり。しいぜんにとどまるにあり）。伝統的な解釈によれば、これは君主（支配者）の政治上の心構えを述べたものになるのであるが、尊徳はこれを抽象的な心の修養の表現として読まない。徹底して農事の経験に照らして読むのである。すなわち尊徳は明徳を明らかにするというのは、荒地を開墾してそこに米穀を生み出すことであるとみる。こういう考えの背景には、自然のあらゆるもののなかには「徳」が存在しており、それは大地もまた変わらない。農作というのは、そのような大地の徳を掘り出す営みであるという考えがあるわけである。

- 2 それゆえ次に大切なのは、それらの生産物を半ばは消費し半ばは将来のために譲ってゆくという「推譲」の道だ。それが「親民」にすることの意味である。そのように開墾と推譲の道を維持してゆくことこそ「止於至善」ということの意味であるはずである⁽⁵⁾。確認すれば、尊徳の趣旨はこれを単に支配者の心得として読まず、農事に即して人民全体の安寧を切り開く心得として読むことである。「書斎」の読書として考えるなら問題にならないこのような「破天荒」なものの見方を尊徳以外の誰がなしえただろうか。そこには自己の人生と人間観に照らして書物の意味を照明するという尊徳の確信があるわけである。

尊徳の文脈をその意をとってさらにたどってみたい。一体、書を読んで実践しないということは、鋤を買って耕さないというのと同じではないか。耕さないなら鋤を買って何の意味があるのか。実践しないなら書を読んで何の意味があるのか。そもそも読書と実践が互いにあいまった関係であるということは、織物にあたっての縦糸と横糸の関係と同じである。書物ばかりを読んで実践しないものは結果としていたずらにあれこれと（無意味な）多読せざるをえない。しかし実践しようとするれば、一字一句でも生涯それを検証せざるをえないのである。

経書というものは道を記したものであるが、それは水が氷になったようなものなのだ。朱子の注釈などはその下にぶらさがった氷柱（つらら）のようなものである。ますます解けにくくなるものをましてさらなる細註などに至っては、反吐（へど）を吐いて聖經を汚すも同じである。経書に記された道というのは人倫日用の道であることを忘れてはならない。何より氷を解かず温気というのが胸中になければならぬ。世の中の神儒仏の学者が何の役にも立たないというのはこの温気がないためである⁽⁶⁾。

こういう明確な確信があるならば、また仏教の經典についても尊徳の果敢な解釈は自在に及んでゆく。尊徳は仏教の様々な用語にそれ自体としてこだわりその意味を独自に考えてゆく傾向があるが、「極楽国土」ということについてもそうであった。そこには七宝の池があり、池の底には金砂が敷かれており、八功德水にそこは満ちていると説く。人々はそこに行くことを憧れるけれども、自分からみれば、七宝の池とは田地のことであり、功德水とは灌漑のことであり、金砂とは米のことである。勤労に努めればそれらの宝が得られるのである。我々の住む現世はこの通り豊饒なものである。これこそ極楽の浄土というものではないか。むろん働かなければ得られないし、よく働けば多く得られ、少し働けば少しだけ得られるものだ。実にわれらの一心のしだいによっていずれの地にあってもそこは浄土になるのだ。士農工商各々その業を楽しみ、その他のことに煩わされないならばそこが浄土である。子孫が多くあっても安住の家がなく衣食に困るならばそれは地獄である⁽⁷⁾。

語録巻三にはこのような論説がふんだんに展開されているが、尊徳が經典を常に人間とその現実へのメッセージとして読もうとしていることがわかる。そういう意味で尊徳はそれまでの日本の思想家に照らしてもまれにみるリアリストであったといつてよいだろう。そしてそれは間違いなく、自己の農民としての経験から照明された人生と人間に対する確信から発するものであった。

3 報徳—「公」に転じてゆく道について

前節との関連で私たちが尊徳によって示唆されるのは、尊徳が農耕の作業を「徳を掘り出す」という意味においてとらえていることである。その道歌に「天つ日の恵みつみおく無尽蔵鋤でほり出せ鎌でかりとれ」とあるのはその事情を物語っている。そのように農耕は大地の無尽蔵の宝を掘り出す営みであった。その意味で実に創造的な営みであった。そしてここにはまた重要な意味が付託されていると思われる。

それは人間の存在というものがそもそも私的な存在ではないということである。「人体」は「天地之靈氣」によって成り立っているものである。「故非私物也」と。尊徳はまた「天徳」という用語を頻用する。この世のあらゆる存在には「天徳」が付与されている。行為するというはその「天徳」を他者に押し譲ってゆくことなのである。ここに常に個人性から脱して公共性の場へと自己を押し出してゆく尊徳の人間観がみられる。この点こそ尊徳の人間観の核心である。尊徳の勤儉実行はいわゆる私腹を肥やすような自己独占的営為を言うものではないのである。

むろん尊徳個人においてみれば、それは最初からあった自覚とは言えない。幼少の赤貧から他者の追従を許さない勤労によって一家再興を果たした尊徳であった。人生の経緯がそこまであった

ならば尊徳はたかだかこの地のそれ相応の中農として人生を全うするはずであった。しかしはからずも服部家の再興を委任され、さらに桜町再興の事業を委任されるなかで、尊徳は自己一身の場を守り切るか、おのれを捨ててこれらの復興に全身全霊を捧げるかの選択を迫られた。そして尊徳は後者を選んだ。それは自己一身の生活を捨ててより大きな公的なものに自己の人生をかけることであった。ここに尊徳一個の人生の大きな転換があった。そのように尊徳の人生の転換には外的な契機が作用したといった事情はあったにしても、彼が選び取ったこの「公共性」の道こそ人間存在の本質であるということが、やがて尊徳における人間観の絶対の支柱になっていくのである。

この公共性は彼の言う「分度」と「推譲」によってはじめて（あるいは辛うじて）確保されるのである。「分度」は先の「天徳」と響きあう。俗に「入るを計って出づるを制す」というが、人間には天によって与えられた生活の基準（天徳）というものがあり、それを決して越えてはならない。目前にあるものをすべて使い切る、食べつくすというのは禽獣の道である。分度の外に余る「分外の財」は明日に譲り、そして、他者、全体に譲ってゆくのである。歴史の展望と社会の広がりを視野に入れたこの推譲の道こそ人間たるゆえんであることを尊徳は至る所で述べている。

しかし人間はまた私欲にまみれた存在であるから、このことは強い意志なくしてできることではない。それは「私」を越えてゆくこと、克服してゆくこと、放棄してゆくことにおいてはじめて可能となる。尊徳の全人生にはこの「公」において「私」を捨てるという強い意志の響きがみてとれるのである。つまり人間は生物的に人間であるがゆえに人間として認知されるのではなくて、ここに言う意志の発揮においてはじめて人間になるのである。尊徳が「人心」に対して「道心」、「天道」に対して「人道」という言葉を使うとき、そこにはこのような事情が反映していることがみてとれるのである。「計自家便利者。人心也。」（自家の便利を計る者は人心なり）「儉己推人者。道心也」（おのれを儉して人に推す者は道心なり）。(語録巻三)「夫天道自然也。人道非自然也」（それ天道は自然なり。人道は自然にあらざるなり）(同前)。

実際、この「おのれを捨てる」という覚悟と意志は尊徳みずからおのれに厳しく課したところでもあり、また人にも厳しく求めたところであった。私たちが尊徳に「躓く」ところがあるとすれば多分この究極処においてであろう。尊徳の事績として伝えられる川崎屋孫右衛門についての教導^⑥などその最たるものであると思う。孫右衛門の事情についてはこの小稿で尽くせない。しかし要は、暴民に家を壊され財を奪われ、あまつさえ騒動の拡大を恐れた官によって入牢を強いられること三年に及んで出獄、憤懣やる方のない孫右衛門に尊徳は所有する財をすべて民衆に投げ出せというのだ。「泥棒に追い銭」ではないのか。こういう文脈のなかで尊徳の言行に「躓く」のはまた人間普通の常識であろう。

この「私」を「公」に転じてゆくということが尊徳の用語によれば「報徳」ということになるのであるが、肝心なのはそれに「無理」があってはならないということであった。してあげたとか、犠牲になったとか、こういう心が残存する限り、それは「報徳」の所業ではない。それならばそこにはまだ「私欲」の芽が潜んでいるからである。尊徳が人間においてもっとも危ういとみるのがこの私欲なのであって、それを尊徳は生涯、凝視し続けたといえる。

私はそのような尊徳の文脈を追ってくるなかではからずもイマヌエル・カントの道徳論を想起することができた。カントがその道徳論のなかで最も警戒したのも、単にその行為が道徳的なかたちに沿っているというような場合ではなく、行為する人間自身が「美しい」自己満足感に満たされている場合であった。そのことをカントは『道徳形而上学原論』のなかで縷々述べている^⑦。

たとえば、ものを売る商人の顧客に向ける親切が彼の言う道徳性にふさわしくないのは当然であった。私たちはそのようなものを道徳的行為とは言わない。なぜならそこには根本的に私利を大事

にする意図があるからである。またカントは自殺すらも「自愛」すなわちエゴイズムに属するものとして否定した。そこで困難なのは世に博愛家とよばれる人々の行為で、それらが格別の名誉心や自利心から出たものでないだけに、それが無条件的に称賛されることがあるのであるが、カントはこの博愛家のうちにすら、抜きがたい「自己満足」の危機をみようとするのである。私たちがカントに「躓く」のも多分このような文脈においてである。この「自己満足」の心性こそ人間の無意識の傲慢につながってゆくからである。カントはそのような究極のエゴイズムを排除したところに「善意志」という用語をおいた。「私達の住む世界ではもとより、およそこの世界以外でも、無制限に善とみなされ得るものは善意志よりほかにまったく考えることができない」⁽¹⁰⁾。私はこのカント言うところの「善意志」のなかに、尊徳の「報徳」の心を重ね合わせて納得するのである。また思えば、『歎異抄』に残されている親鸞の言葉もそのような意味での人間の究極のエゴイズムとの苦闘の跡を示すものであったであろう⁽¹¹⁾。

4 一円融合の世界への確信

この世界が争闘と対立の世界でなく、一円融合の世界であるという認識は、当然のことながら、ひとりひとりの「天徳」が生かされ、互いに相補いあう共同の世界の理想へ人を導く。尊徳を否定する「定番」の物言いのなかに、彼は結局、「金貸し」であり、世界観は狭く、封建制度の根本的な矛盾をなにとつ認識せず、体制に奉仕した人間に過ぎなかったというものがある。歴史を階級闘争とみる戦後の階級史観からみれば当然出てくる見解であろうが、階級闘争だけが社会を改革する方法なのではない。そしてこの見解があたらないことはこの小稿のこれまでの記述のうちからも納得できると思うのであるが、今ひとつ現実的な問題として言えるのは、その農村改革の仕法のなかで、その仕法を最も嫌がったのは武士階級であったということである。尊徳は荒廃した農村の復興のためにむろん農民に厳しい自己管理を要求した。しかし、それ以上に尊徳はその農民の「支配者」であるところの武士に対してより厳しく「分度」の管理を求めたのであった。それは労働によって飯を食わないかれらにとっては想像を絶する生活の切り下げになるわけである。「支配者」の自己管理が徹底しなければ、農村復興、仕法は決して成功しないというのが尊徳の確信であった。この厳しい自己管理を労働しない武士が嫌がったのも無理はない。この点だけを見ても、尊徳がただ体制に唯唯諾諾として従うだけの軟弱の徒であったとは言えないことが理解できるだろう。ただ尊徳が幸福だったのは小田原藩主、大久保忠真はじめ、少数の理解者が「支配者」の側にいたことである。これら理解者なくして尊徳の仕法の事業は決して成功しなかったのである。

尊徳の精神は明治以後も報徳社の活動によって長く継承されることになったが、下村湖人の『次郎物語』第五部⁽¹²⁾に静岡の杉山報徳社への訪問が挿入されているのは印象深いことである。軍靴の響き高まる時勢のなかで、友愛塾という自主共同の青年塾が追い詰められ、その最後の修学旅行としての訪問なのであるが、そこには著者下村湖人が友愛塾の描写に込めた尊徳の精神の具現が見られるだろう。また尊徳を高く評価した人に武者小路実篤があった。その「新しき村」の構想にも尊徳の精神が響いていると言える。実篤はまことに尊徳のよき理解者のひとりであった⁽¹³⁾。

5

なお、尊徳の思想が示唆するところのものを現代の学校教育、道徳教育との関連において考えておきたいのであるが、戦後の学校教育が根幹にしたものがあるとすれば、それは端的に言って「合理化」の精神であったと言える。むろんそこには技術革新をひたすら推し進めてきた現代社会の反映がある。

「無駄を省く」ということ、「寄り道をしない」ということ、それは偏差値重視の教育傾向のなか

にあつて無視することのできない前提であつた。そのためには与えられた知識の体系を要領よく呑み込んでゆくのが最も便宜なのであつて、この一方通行的な傾向は現在の道徳教育にもある種の影を落としていないとは言えない。

いわゆる試行錯誤でなく、考える姿勢はすでに与えられた選択肢のなかから「正解」を選びとる作業に向けられるのである。しかしそれは実は「思考」というものでもなく、まして「経験」というものでもない。要するに現代の学校教育はあまりにも真の思考と経験の通路から遠くおのれを遠ざけているのである。

尊徳もまた「合理主義者」であつたということは、その綿密極まる仕法書を窺うだけでも納得できるわけであるが、しかし、彼の合理化は徹底的な自己検証と悪戦苦闘の末に獲得されたものである。その根底には自己自身によるところの、やむに已まれぬ意欲の発動がある。この意欲の発動がなければ生活に対する本当の確信も生まれぬことを尊徳は知っていた。彼があらゆる人に対して期待したのもこの自己自身による意欲の発動であつた。その意欲の発動を尊徳はじっと待ち、その上で人を評価した。しかるに、ここに必要とされる時間の熟成を現代の学校教育はもとより、現代というものが失いつつあるかに私には見える。精神の葛藤なき合理化は尊徳の精神からまったく遠いものである。

尊徳が、我が本願は人々の心の田の荒蕪を開拓するところにあるのだと言うとき^(①)、念頭に置かれていたのはそういう葛藤の上に成り立つ精神の力である。彼は決して単なる技術者ではなかつたのである。

同時に、私はここで尊徳の印象深い逸話を想起しておきたい。それは赤貧洗うがごとき困苦のなかにあつた少年時代、尊徳が通りがかりの旅の僧の読経、それは観音経であつたが、それを聞いていたく感激し、なげなしの二百文を喜捨して再度の読経を頼んだという話である^(②)。あの貧困のなかにあつてのことである。尊徳の生涯には印象深い話がいくつも伝えられているが、それらのなかで、特にこの話は尊徳の内奥に潜む精神の秘密を解き明かす鍵として私には一層印象深く受け止められる。

それは決して日常性のなかに沈淪するのではなく、ときとして日常性を脱皮し、そこから飛翔する自在な力を持っていたということである。こういう精神の自在な飛翔の力があればこそ、彼は生涯の仕法の事業もなしえたのである。これをあるいはその言葉の本来の意味で「遊」の精神と言うべきであろうか。あるいは「狂」と言ってみるべきであろうか。そしてこれらの精神も現代が忘れつつある現代への警鐘として、尊徳の書を読むたびに私の胸中に響いてくるのである。

【註】

(①) 富田高慶(1814-1890)は元相馬藩士、尊徳の仕法を生涯助け、明治に入ってからその事業を推進した。明治41年従五位を贈られる。『報徳記』は本文にも記したように、尊徳逝去の直後に書かれた尊徳一代記であるが、尊徳の事績を知るための最も基本的な文献である。のちに多く書かれるようになった尊徳伝も結局この書の大筋を離れることはできない。本稿では昭和8年内外書房発行の『報徳要典』所収の文章に拠つた。福住正兄(1824-1892)は相州大住郡片岡村の名主の生れ。入門は尊徳59歳のときであり、『二宮翁夜話』は尊徳に近侍した著者の記憶が根底の材となっている。本稿では上掲『報徳要典』所収の文章に拠つた。斎藤高行(1819-1894)はやはり相馬藩士の子として生まれ、富田高慶はその叔父である。入門は尊徳59歳のときである。漢文に優れ、尊徳に近侍して聞き得た教説を密度の高い漢文でまとめたのが『二宮先生語録』である。日本倫理彙編には巻4までが収められており、本稿では日本倫理彙編をもとに現代版報徳全書所収『訳注 二宮先生語録』(佐々井典比古著)をも参照した。

- (2) 二宮尊徳偉業宣揚会によって昭和2年から7年にかけて刊行。全36巻。
- (3) 一円融合会刊。『報徳記』上下各一冊、『報徳文献選集』、『報徳生活の原理と方法』、『訳注 二宮先生語録 上』、『訳注 二宮先生語録下・報徳外記』、『報徳仕法史』、『訳注 二宮翁夜話 上』、『訳注 二宮翁夜話 下・富国捷徑 抄』、『解説 二宮先生道歌選』の文献を全十冊に収める。
- (4) 前掲『二宮先生語録 上』p 6
- (5) 前掲書p126。同書の通し番号では191。
- (6) 前掲書p53。同書の通し番号では74。
- (7) 前掲書p151。同書の通し番号では220。
- (8) 前掲『報徳記』巻4参照。
- (9) カント『道徳形而上学原論』（篠田英雄訳 岩波文庫）p24以下参照。
- (10) 前掲書p17。同書冒頭の文章である。
- (11) 『歎異抄』岩波文庫版参照。
- (12) 『定本 次郎物語』池田書店刊参照。同書p499以下参照。
- (13) 武者小路実篤全集（小学館）第9巻に尊徳関係の文章が収められている。
- (14) 『二宮翁夜話巻二』前掲『報徳要典』p71参照。
- (15) 『報徳記巻一』前掲『報徳要典』p 8以下参照。

なお尊徳の評伝として筆者が感銘をもって読んだものをあげておけば、佐々井信太郎の『二宮尊徳傳』（昭和10年日本評論社）がある。著者がその「述作由来」で述べているように、富田高慶の『報徳記』を高く評価しながらも、そこに取替えて省略されている「年代と仕法事業」の計数を補完しつつ、重厚な評伝となっている。昭和14年に服部辦之介が著した『二宮尊徳の哲学』は尊徳の世界観を端的明快に切り取ろうとした意欲に満ちている一書である。さらに、昭和40年代には宮西一積氏が『二宮哲学の研究』『報徳の人間像』などの書を著し、尊徳理解に啓蒙の業績を示した。昭和34年に刊行された歴史学者、奈良本辰也氏の『二宮尊徳』（岩波新書）は歴史学者の視点から尊徳の歴史の意味について言及しているのが新鮮である。昭和51年には理想社から、二宮尊徳120年祭記念事業会編として『二宮尊徳と現代』という一書が刊行された。多様な視点から尊徳を述べる文章が集められている。最近では平成14年に刊行された三戸岡道夫氏の『二宮金次郎の一生』（栄光出版社）がある。「あとがき」で著者が述べるように、前掲の佐々井信太郎の『二宮尊徳傳』に深い影響を受けていて、この書を現代にわかりやすく伝えたいという根本の動機を述べている。過不足なくよく尊徳の生涯を記述しており現代において読みうる尊徳伝であると思う。いずれの書も尊徳を論じて位置を占めているが、その精神の根底の「遊」と「狂」を正面から論じているものはない。尊徳の「神聖」性の根底にこの人間性の過激な情熱をみたいというのが、私がこれまでの学びから受ける率直な思いなのであるが、しかしそれはなお後日に課せられる課題であろう。（了）

（受理 平成26年10月14日）